

当時の非常事態をくぐり抜けた数多くの人々の中で、このような記録を書き残す機会を与えられた者は、ごく一部にしか過ぎないであろう。しかし私自身の経験した苦労など、物の数には入るまい。とりわけ、今や永久に物言えぬ人々、非業の死を遂げられた人々の思いを代弁するほどの資格はない。

戦争は、この世で最も大切なものとも言うべき平和な家庭を無残に引き裂き、無数の人々の生命とその未来を奪い去った。このような結末に至った最大原因として、当時の国のあり方、統治体制や国策に重大な誤りがあったことは、疑い得ない事実だと思う。亡くなった人々の死を無駄にせず、その霊をいささかでも慰めるには、かつての日本のたどった道を、決して二度と歩まないことである。

母子のあてどなき避難行

香川県 森 ミヨ子

一 満州移住までの生活状況

私は、大正十一（一九二二）年八月十五日に当時の香川県三豊郡仁尾町で生まれました。姉兄妹の九人きょうだいでしたが、三男の兄がそのころ流行したジフテリアで、また姉はお嫁に行ってから、さらに次男の兄は復員してからそれぞれ死亡してしまい、結局は六人兄妹になってしまいました。

父は天産物の仲買問屋をしていて、農家の人が作った唐辛子とか除虫菊とかの乾燥した物を買って、薬品会社やカレーソース会社と売買取引をしていました。父はそれぞれの品物の品質を確かめて等級を付けて、その品物の値段を決めたりしていました。長男の兄もその仕事をしていて、父を手伝っていました。母は、先方が持って来た

品物を袋に入れ替えたりする仕事を分担していました。

父は厳格な人でしたが、子供もかわいがつてくれました。母は何事にも父を立てていましたし、子供を大事に育ててくれました。私たちは、そのような家庭で子供時代を過ごしました。

私が二十歳になったころのある日、近所の小母さんが来られて、「ミヨ子さんをお嫁にあげられませんか？」と森さんの話を持ってきてくれました。父は「森さんのとこの、あの子だったら良い子らしいなあ！でも満州はちょっと遠すぎるなあ」と言うと、母も「満州は、熊も虎も山にいるという話だ」と相づちを打っていました。それから、いつとき父母は森さんの話をしていましたが、結局「ちょっと遠すぎるので」ということで小母さんにお断りをしました。

それから森さんについて、森さんのお兄さんやお母さんからいろいろな話が伝わってきました。学校でも、先生が「森ならば、大学を受験しても

絶対に合格する。僕が保証する」と言っていたとか、また森さん自身は、「両親がこんな年をとっていることに気付かなかった。これからは親の世話にならずに自分の力で生きる」と決心し、このためには今は勉強するしかない」と心に決めて必死になっている、という話も聞きました。この話を聞いた父は、私との縁談話について多少気が進んだようでした。

「一度会ってみたら！」と言う父の言葉に、初めてお見合いをしました。父も心配していて、家に帰ると待っていたごとくに「どうだった？」と言って様子を聞きました。私が「頭の良いまじめな人柄のようで、うそのつけない人という感じだった」と答えました。「それだけ本人が感じるならば良い」と言って、それからいろいろと調べてくれました。

森さんは叔父さんに、「私は建築家になりたいのですが、どうすればいいでしょうか」と相談したそうです。叔父さんという人は森さんのお母さ

んの弟で、若いころから建築家で寺を建てたり、五重の塔を建立したりしたほどの腕を持った人でした。そこで、叔父さんは「学校に行くのが一番だ」と思うが、まだ大学に行く決心はつかないのか」と言うと、森さんは「そうです」と簡単に答えたそうです。「では」と言つて、叔父さんは大きな箱を持って来て、その中から筆書きの建築書を取り出して、「これを全部読んで納得したら家は建つ」と言つたとのこと。そこで森さんは半年ぐらいかかってそれを勉強して、「叔父さん！ だいたい分かりました！」と返したそうです。叔父さんは「半年ぐらいで分かるものではないと思うが、それにしても早いなあ！ そんなに言うのなら、ひとつ家の倉庫でも建ててみるか」ということになりました。一人で建て終わつたとき、叔父さんは非常に喜び「実績を重ねてさらに頑張れ」と励ましてくれて、「この上は、やはり経験を積んだ人のそばで仕事をする方が、早く上達する」と言つて、以前叔父さんが仕事をしていところ一番腕の

良い人で、安藤さんという人の話をしてくれたそうです。安藤さんは、当時満州の東寧で軍の工事も請け負っている人で、以前から「仕事のよく分かる人を世話してほしい、と頼まれているので行かないか」と言われ、一応家に帰つてお父さんに話したら、お父さんは「満州なんて！ そんなに遠い所へは行かせない。お前には分家したときに譲る田畑などがあり、遺言してある」と言つて反対されました。そこまで言われると、年をとつた父に逆らうこともならず、満州行きを一時見合わせる、近くで頼まれた家を建てることになりました。

その後、お父さんは急に体を悪くして亡くなられました。建てていた家が完成したころ、自分の希望を捨てきれずに「お母さんを頼みます。僕にくれるという田畑はいらないから、満州に行かせてもらいます」と言つて、安藤さんの所に行つたそうです。

ときが経つて、安藤さんから「森さん、そろそ

ろ一人立ちしてはどうか。最初のうちは私も応援しますから」と言われたそうです。

一度、お母さんや家族の人々に安心してもらうために、仁尾に帰る決心をしました。お母さんに、「一人立ちして仕事をするとなると、独身では重みがない。嫁さんを探してほしい」ということを頼んだそうです。再び私への話がぶり返しました。

安藤さん家族の熱意や仲人になる人の熱心な勧めで、父の気持ちもだんだんと和らいできて、「もう一度、会ってみたら」ということで、仲人さんの家で見合いをしました。「あんなに真面目な人もいるのね。考えていることの筋が通っている」と話したら、母も「それが一番」と喜んでくれました。

仲人さんには二、三回会ってからと伝えましたが、森さんは仁尾に帰ってくる時、やはり東寧に隣町の高瀬町出身の永江さんと一緒にになり、奥さんを満州に連れて行くのも一緒に、と話を決めているとのことでした。それではということ

簡単に式を挙げてということになりましたが、田舎のことで時間が足りないほどでした。式は昭和十七（一九四二）年二月二十日でした。

森さんは二十四歳、この日から私は浪越ミヨ子から森ミヨ子となりました。式の当日、父は私を呼び、そつと「結婚式を済ませて満州に行くが、付き合いも浅く気心も十分に分からないのだから、どうしても二人の気が合わないときには、いつでも帰って来なさい」と言いました。親心の有り難さが、しみじみと身にしみました。

二 避難までの生活

永江さん夫婦とは、式後二、三日して詫間駅で落ち合い、新天地に向かつて出発しました。

関釜連絡船で釜山に着き、朝鮮の凶們から牡丹江に行き、そこで三、四泊しましたが、この間いろいろとお話をして楽しい道連れとなりました。東寧は高原の駅で、眼下に灯がともしり広々とした静かな街でした。左手には小高い丘が続き、内地では見られないような空気が薄くそして青く、夜

のせいか雪かとも思い、それをしばらく眺めたことでした。

新居に着くと、ほっとしたような反面、不安なような複雑な気持ちでした。永江さんとは三、四軒離れていましたが、近いので安心しました。

主人は何が好きなのかと考えていると、「心配することは無い、僕は今まで自炊していたから」と言っただけであれこれ出してきて、第一日目の朝ご飯はできませんでした。買い物にも連れて行ってもらいました。近くには興農合作社があり、何でも売っていて反物まであって、まるでデパートのようでした。現在の農協と同じでした。

五月になると花が咲き競い、花見の行事もありました。貸本屋もあり、よく借りては読みました。結構楽しく過ごしていて、このまま遊んでいてはもったいない気がして、興農合作社の仕立物の仕事をさせてもらっていました。二年目のころに体の具合がはつきりせず、「気分が悪いの、どうしたらよいかしら？」と言ったら、「早く医者へ行かな

いと駄目じゃないか！」と言われ、すぐに行きましたが、どの医者にも「どこも悪くない」と言われました。最後に行った医者にも、「一度産婦人科へ行って下さい」と言われてそこに行ったら、「森さん、おめでたです」と言われました。帰って主人に話すと、「それは良かった！」と喜んでくれました。内地の両親にも便りを書き、安心してもらいました。昭和十八年の七月に長男の登志郎が生まれ、元気がかわいく育っていました。

三 召集令状、建設部隊へ

昭和二十年五月には主人に召集令状がきて、建設部隊に入隊しましたが、思いも寄らぬことでした。主人は近視がひどく、兵隊検査でも丙種合格でした。周囲の人たちも「森さんにくるのだったら、僕たちも覚悟しなければ」と言っているうちに次々と召集されて、仲間が残っているのは安藤さんと永江さんの二人になりました。東寧に残った男性は、在郷軍人として東寧を守ることでした。

主人に召集があつたときには既に二人目の子を妊娠しており、八月二日には近所の人に子供を頼んで入院しました。入院してすぐに出産、九日には退院しました。近所の方々にお礼を言つて、登志郎に「お利口にしていたの？」と聞くと「お利口にしていたよ、ねえ小母ちゃん」と言つていたので、ほつとしました。「今日、僕は赤ちゃんとお母ちゃんと三人で寝るよ」と言つてききませんので、「お利口にしていたご褒美に三人で寝ましよう」と言つと、「赤ちゃんの名前は？」と聞くので「美津志つていうのよ」と言つたら、「美津志、美津志」と飛び回つて喜びました。親子でこんなに嬉しく楽しく過ごしたことは、このときが最後で、それからは二度とありませんでした。

四 あてどない避難

夜中にこんこんと戸をたたく音がしたので、慌てて「はい！」と返事をしましたら、「明日の朝、空襲がありますので避難して下さい」という連絡でしたが、言っている言葉の意味が分からず頭が

ぼーっとしていて「私は体が悪いので今日は少し休ませて頂けませんか？」と言つてしまいました。再び外から声がして、「奥さん！ ソ連軍の空襲ですよ」それを聞いた途端に頭がふらふらとして、どうしたら良いか分からないまま、「ありがとうございます」とだけ答えました。この一言で天地がひっくり返ろうとは、思いも寄りませんでした。急いで赤ん坊の美津志を抱くために、家中の風呂敷を全部出して、一番大きいのを私の首の後ろで結び、美津志を抱き起こして風呂敷に入れていたら、長男が目を覚まして「母ちゃん何をしてるの」と言うので、「ここには居られないから、よそへ行かなければならないの。母ちゃんが登志郎をおんぶして、美津志はだっこして行こうね。朝早いから今のうちによく寝ておくのよ！」と言つと、「はい！」と言つて再び安らかに寝ました。

お乳が出なくなるといけないので、ミルクを袋に詰め、別の袋におむつを入れたり身の回りの品だけをまとめると、朝になつてしまいました。お

隣の奥さんが、「もう用意できましたか?」と声をかけてくれましたので、「だいたいはね!」と答えて登志郎を背負い美津志を風呂敷に入れ、表の空き地へ集合してそのまま出発となりました。最小限にしたはずの荷物もあまりにも重く、その上産後の出血がひどく、決心はしていましたが一人のために皆に迷惑はかけられません。「あつ」と思ったのは一瞬のことで、私は立っていられなくなりました。ここからだつたら、何とか家へ引き返せると思ったのです。「家で死にたい」という気持ちに急に起きてきました。「皆様にお礼を言つて下さい」と言つて、今来た道を引き返し始めました。そのとき安藤さんの奥様が「皆さんで相談しましょう」と言つて下さつて、安藤組の人たちも引き返してくれました。地元の満人に相談しますと、「東寧は戦場になるから、私の荷物とタイタイ（奥様）を連れて南の方へ行きます」と言うので、安藤さんの奥様の手配で、私はその満人の荷車に乗せてもらうことになりました。すべては安

藤さんのお陰で、私は深く感謝しております。

山道に差し掛かった所で、「この道は狭くて危険だから、頂上までは歩いて下さい」と言われて、上を見上げると、あまり高い山でもありませんでしたので、急な山を一步進んでは休み、休んでは一步歩きながら登りました。ふと歩きながら、昔教えられた一步一喘というのはこのことかと、急に思い出しました。抱っこした美津志が静かだけれど、死んではいけないかと心配になり、たびたび確認し、また背中の登志郎にも声を掛けると、「うん大丈夫だよ」という声が聞こえてきて安心しました。登りきった山がバンザイ峠だと思ひました。温かい所へ座つて、舌を美津志の口へ持つていくと吸うようにしたので、口のつばを口移しに飲ませました。ここでおむすびが配られました。おむすびがこんなにおいしいと思つたのは、初めてでした。登志郎もおいしそうに食べ終えていたので、やつと安心しました。そのとき、「森さんではないですか?」と聞かれたので「そうです」と返事す

ると、その人は「顔がものすごく腫れているのでびつくりした。違う人かと思った」と言いました。その人は前から仲良くしていた稲田さんでした。私も嬉しくなり、それから一緒に行動しました。

いくつ山を越えたでしょうか。野宿ばかりで食べ物は何もありませんでした。「これが食べられる草よ」と教えられると、それをちぎって食べましたが、何よりもキュウリには水分があつて食べ良かったと思います。

そんな悲惨な日が続いていたある日の夜、登志郎はねんねを敷いた上に、私は美津志を抱いて寝ていました。まだ夜も明けきらず薄暗いころ、稲田さんが「奥さん、昨夜は美津志ちゃんが大きな声で泣いてたわよ！」と言ってくれました。私は、「子供がよく寝てくれて助かったと思つていましたのよ」と言いながら、急いで美津志の顔を見ました。こんな親があるでしょうか、美津志の顔にチアノーゼ症状が出て、既に事切れていました。「ああ、どうしよう」「どうしたらいいの！」

私は頭の中が真っ白になってしまいました。周りの人からは「森さんは気が変になつたのでは」と思われたことでしょう。死んでしまった美津志を手離すことも埋めることもできずに、そのまま抱いて暑い八月の日中を皆さんの迷惑も何も頭になくなり、ついて歩いていました。そんなとき、途中で武装解除になつた兵隊さんだろうと思われる人が「奥さん、死んだ子は仕方がないからその子は埋めてあげなさい。上の坊やを連れて、無事に日本へ帰らないといけないでしょう」と言ってくれたときに、はつと気がついて我にかえり「お願いします」という言葉がやつとお願いしました。改めて「よろしくお願いします」と頼みました。一緒に歩いていた人たちも兵隊さんと同じことを言わなければならないながらも、私の様子が変わつたので言い出せなかつたのだと、後になって思いました。迷惑を掛けたと、今でも申し訳なく思っています。

皆さんのお世話により、美津志を深く掘つた穴

に埋めて、寒さに向かうからと、ねんねこでくるんで、足の方から少しずつ土を掛けました。大きな木の下だから、雨にもあまり濡れないでしょうとも言われ、たくさんの花を供えました。この日の、この子のための歌です。親心と思つて下さい。

明けやらぬ野宿の草に抱きし子の
チアノーゼ見しより我の乱れむ

息絶えし子を埋めかね涙すら枯れて
彷徨う炎夏の山に

みどり児の瞑りいる故この木陰獣ら
静に通りゆくべし

みどり児をかかえ幼を背負いたり
戦後七日の何処まで逃るる

みどり児を埋めし土に赤き花飾り

くれたる人を忘れず

美津志が亡くなったのが、バンザイ峠のある山です。

美津志が亡くなってから数日経ったころのことと思います。先方に大きな建物が見えました。「あれは収容所らしいので聞いてきますから」と、先頭を歩いていた人が行って話をしてくれました。東寧の方も何人かおられるので、入所させてくれるとのこと、十人余りの人がお願いすることになりました。所々にこのような収容所があり泊めてもらえたので、避難民は随分と救われたことと思えます。

その翌日、朝早く目覚めて周囲を見渡しているときに、入口の方で十三、四歳の子供が男の人にたたかれていますので、驚いて「どうしたのですか？」といって話を聞くと、この子が食べ物がほしくて店で売っている饅頭を盗んだそうです。私は言いようもなく、これは謝ってあげるだけでは

済まされないという気がして、「僕いくつ？」と聞いたら、「十三歳」と言いますので、「僕、十三歳にもなっていれば、いくらほしくても人の物は盗んではいけないことぐらい分かるでしょう」と言う。「分かる」と言うので、「そうしたら小父さんに、絶対これからは人の物はとりませんと謝りなさい」と言いました。「小父さんごめんなさい」と言いかけると、男の人もその奥さんも「もう良いですよ」と言ってくれました。僕に「あなたにはお母さんや家族の人はいないの？」と聞くと、「お母さんとお姉さんと僕と三人で避難してたけど、ソ連兵がお姉さんを連れて行った。おばちゃん！お姉さんは首を吊って死んでしまいました。お母さんが『ちよつと行ってくるからここにいなさい』と言ったのに、いつまで待っても帰って来ないので、あの小父さんについてきたの」「そうだったのか、かわいそうね。でも僕は大きいから頑張つて日本へ帰るのよ！」と話しましたが「僕は、日本のどこに帰るのか分からないんだ」と言いましたが、

それを聞くとたまらない思いになりました。「小母ちゃん、僕小母ちゃんの横で寝ても良い？」と言うので「良いけども、あの小父さんに聞いてからね」と言ったら、「小父さんに聞いたら、『いいよ』と言ったから寝かせてね」と私のそばへ来ました。私もその男の人に「良いのでしょうか？」と聞くと、「良いですよ、寝かせてやって下さい」と言われたので、登志郎の横へ寝かせました。少年はそれから二、三日は私の横で寝たり起きたりしていましたが、四日目ぐらいになると何も食べないで寝てばかりいましたので、「食べないと起きられなくなるよ」と言いましたが、「ほしくない」と言つて寝ていました。その夜の九時近くになったころ、「ああ暗い、暗い」と何度も繰り返すので、「私にはよく分からないのですが、どうしたのでしょうか？ あんなに言っていますか」と、割に年配の男の人に聞くと、「ああ、あれはあの世へ行く道が暗くて、さまよっているのですよ」と何気なく話しましたが、それを聞いたとき私の体

は震え、すべての筋肉はかちかちになつていました。しばらくしたら「開かない！ 開かない！」と言うのです。また説明してくれて、「これはあの世への扉が開かないのです」いやだ！ かわいそう！ お母さんはどこへ行っているのかしら。心の中で手を合わせました。またしばらくすると、「開いた！ 明るくなった！」「お母さん、お母さん」と少し大きな声を出してから、息を引き取りました。私は泣きながら、「小父さん、あの声はお母さんに会えたわね」と言ったら、その男の人も「うーむ、あの声は会えた声だよね」と言ってくれました。

こんな話は、仏様やお寺様のお導きの話では聞いたように思いましたが、本当にあることでした。私には生涯忘れられないことです。この亡くなつた子は、お母さんもお姉さんも亡くなり、歩いて行く道が分からなくなつていたので思い、かわいそうになり、手を合わせるほかありませんでした。

五 東京城収容へ

多くの人々のお世話になりながら、避難を続けていました。「この次は東京城とうきんじょうへ集合します。皆さん頑張つて下さい。東京城には日本人も多く、収容所もあるでしょうから、食事も出ると思います。気を落とさないで行きましょう」と言ってくれました。どのくらい歩いたでしょうか、もう夕暮れ近くになっていました。美津志を埋めてからは、何となく気になりました。振り返り振り返りしながら歩いていましたが、これではいけない、気をつけたり持たなければと思ひ直して歩きました。そのうちに、前方に家か小屋のような建物が見え、近づいたら空き家でした。男の人が「今日は野宿せずに済む、寝られなかったら重なつても寝ましようか」と言つてみんなを笑わせ、ちよつと気楽になりました。二、三人の男の人を先頭にして女、子供はそれに付いて離れず、ここまで来たのです。戸を開けると半間ぐらいの土間があり、その奥に部屋の広さ七、八畳ぐらいで高さ五十七

ンチメートルぐらいの板張りの床がありました。ここで本当に寝られるのかと思いました。しかしすぐに、こんなことを言つてはいけない、雨露をしのげるだけでも有り難いことだと思ひ直しました。子供を連れて外へ出ました。広い畑に、ジャガイモがころころと転がっていました。端つこの方にはキュウリの葉が見えましたが、怖くてそこまでは行けませんでした。きつと、開拓団の人が避難した後ではないかと思うと、寂しくなつてしまいました。床下にはカボチャが転がっていました。だが、だれも食べませんでしたが、しかしこの夜は、屋根のある所で寝ることができて、安心して休みました。

翌日からまた歩きましたが、道中には玉蜀黍トウモロコシの実を付けていましたが、食べられませんでしたが。

「東京城はもう近いぞ！」という言葉に、「良かったなあ」と頭を上げて先を見たら、黒煙がもうもうと上がっていて、東京城の街は火の海で、空は真っ赤に染まっていました。手前の方でも大きな

橋が燃えていて、この橋がなければ東京城には入れなくなつてしまいます。そのうちに大きな橋は川面へ焼け落ち、火に包まれた東京城の人々がどうなったのか、胸痛む思ひました。そのとき、登志郎が思いきり私に抱きついてきたので「お母さんがいるから大丈夫よ」と言つたものの、こんな怖いものを見せたことを後悔しました。川の向こう岸でも、人がいっぱいいるのを見えました。

「一体どうなるのでしょうか？」と聞くと「どうすることもできないでしょう。この辺の寒くない所で野宿ですわね」と言われ、川から少し離れた草の上に風呂敷などを敷き、下着などを着込んで野宿しました。ここに来る道に、きれいなリュックサックが落ちていました。また、少し離れた所にも五、六個の女用のリュックサックが転がっていました。「ああ神様」と言いながら、一番最初のリュックサックを道端へ持つて行き開けました。綿花がいっぱい詰まっていました。「すみません、頂きます」と言つたものの、女用のリュックサック

クがこんなに捨てられているというのは、ひよつとしたら持ち主の女性はソ連兵に連れて行かれたのではないかと思ひ、胸が痛くなりました。一緒に避難していた女の人が、「奥さん、良かったわね、お恵みよ」と言ったことから、ますます胸が痛くなり、悲しい思いが広がるばかりでした。いくらあつても足りない綿花でしたが、私は二度と触れることはありませんでした。

山道でさまよっているときに、満人に会いました。「子供がかわいそうだ。私の家は近いから来て食事しなさい」と言って連れられて行き、食べさせてくれました。私にも食べなさいと出してくれましたので、「謝々、謝々」と礼を言って頂きました。「よかつたら、子供は明日の朝まで寝かせなさい」と言ってくれましたので、頼みました。温突オドドの温かい部屋へと行ってくれましたが、ここで良いからと玄関の温突で寝かせてもらいました。

翌日も、ゆつくりしていきなさいと言ってくれましたが、友だちが心配するからと何回もお礼を

言つて山の方へ向かつて歩きかけると、ちょうど前方から女の人ばかり三、四人がこちらへ向かつて来るので、近づいて見ると、昨夜の人たちでした。私は「心配かけてごめんなさい。男の人たちは？」と聞くと、「遅くに、男の人は奥さん方を連れてこつそり先に行つてしまいましたので、心細くなって森さんはどうしたかと戻つて来たところです」とのことで、私は満人の方にお世話になったことを話すと、わがことのように喜んでくれ、「これからは女ばかりで頑張りましょう」と言つて歩き出しました。

太陽が昇りかけていて、今日は何か良いことがありますように、と思ひながら一生懸命に歩きました。木々の間からこちらへ歩いて来る六、七人の女の人が見えました。逆方向へ歩いているので、どうしたのかと不審に思いました。見れば、白い布を手を巻いているみたいで近づいたら、昨日私たちを置いて行つた家族の人たちでした。その人たちの話では「銃を持った満人に見付かり、男の

人は三人とも殺されました。『女は殺すな』と言っていたが、流れ弾に当たって一人は死に、私も腕をかすられ血がたくさん出て心細くなり、どっちに行つてよいのか分からずに、ここまで来ました。ご一緒させて下さい」とのことだったので、「お互いに頑張りましょう。一人でも多い方がいい」と一緒に歩きました。

しばらく歩いていこううちに、広い道に出ました。道の向こう側に、古いけど大きな家がありました。みんなが「少し休みたいなあ」ということで、戸をたたくと「はあい！」という返事があつて、男の人三人が出てきました。「すみませんが避難民です。少し休ませて下さい」と頼むと、「いいですよ。空いている所はどこでもお使い下さい」と言いました。「お願いします」と子供たちを寝かせて、私たちも手や足を洗つて休ませてもらいました。筵も敷いてあり、有り難く思いました。「いつまでいても良いのですよ」とまで言ってもらいました。

疲れが出てここで何日かどまっていますでしたが、

私はできるだけ早く敦化に行きたいと、なぜか焦っていました。子供も元気そうなので、同じ思いの三人とここを出ることにしました。目標は敦化から吉林に向かい、さらに新京(長春)へ行き新京から葫蘆島へ、そこから引揚船にと決めていました。

出発してしばらく歩いていましたが、道が分からなくなり途中で避難民らしい人に聞くと、その人は「凶們へ行つて朝鮮に入り、釜山から下関に行くのが近いから、私たちはその行程を選びました」と話してくれました。私もお願いしましたが、近くでこの話を聞いていた人が「今は三十八度線とかいう北朝鮮と韓国の国境ができて、北から南には入れてくれず、そこで死ぬ人も大勢出ている」と言うので、再度決心を変えて吉林に行くことにしました。その人に「吉林に行くのならこの道が一番早い」と教えられて歩き出しましたが、歩くどんだんに泥濘になり、脛までもつかる状態で、足をとられてふらふらになり、このままでは親子

共、泥に沈められるのではないかと思ひ、一緒の人の名を呼び合ひ、ひと晩かかつてそこを歩きました。

この湿原の名前は忘れましたが、うんと近道だと教えられたので、その言葉を信用して歩いたのですが、近くで見るとこの湿原は奥が深く、一歩間違ふと絶対に出られなくなつたことだろうと背筋が寒くなりました。だれもこの湿原で沈んだとは聞きませんでした。恐ろしい思い出となりました。普通の道に出られたときは、ああ助かつたと涙が止まりませんでした。

ある寒い夜、寝ている子がうつむいたままじつとしていたので、「登志郎！ 大丈夫？」と聞きましたが、返事がありませんでした。死んだのではないかと思ひどきつとしましたが、ちよつと動きましたので「ああ生きていてくれた」と安心しました。いつまでこんな状態が続くのかと、ため息が出る思ひでした。

やつとのことで敦化へ着いたときは、夢の中の

ようでした。考えてみても、どうしてここまで来たのか、どのくらい寝たのか、何を食べたのか何の記憶もなく、子供はと横を見るとすやすやと寝ていました。敦化の収容所では、一番奥の土間に寝かされました。だれかが連れて来てくれたにしても、私がここと言わない限りは、こんな隅っこへはだれも寝かさないだろうと思ひ、親子で意識が無くなつていたかと哀れに思ひました。この前後のことはどうしても思ひ出せません。やつと意識が戻り「登志郎お腹空かない？」と言つても、こつちを向いてニッコリしているだけでした。それでも「だっこする？」と言つと、そばへ寄つて来て抱かれていました。

少し落ち着いてから「外へ行こうね」と歩いていると、ソ連兵に出会いました。急いで中へ入りかけると、「ベビー何かか？」と言つて登志郎の頭を撫でながら笑つていました。登志郎もニッコリしていました。ソ連兵は、手ぶり身ぶりで私たちを守っているのだ、と言つているようでした。

その夜のことに、二人のソ連兵が温突の上で寝ていた若夫婦とその妹さんの所に来て、その妹さんを毛布でくるんでどこかへ連れて行ってしまいました。その二人のソ連兵をよく見ると、そのうちの一人は昼間登志郎に声を掛けていたソ連兵でした。しばらくして戸が開いたので、みんな一斉にそちらを向いたら、さっきのソ連兵たちで、一人は銃を持ってみんなを睨みつけ、一人は妹さんにくるんでいた毛布をぱつと剥ぎ取り、急いで出て行きました。妹さんは真つ青な顔をして、泣きながら一日寝ていました。ソ連兵は次の夜もやって来ましたが、みんなどうすることもできませんでした。

それから三日目の夜、私はトイレに行くので恐る恐る戸を開けると、そこに銃を突きつけるようにしたソ連兵が立っているのです、びっくりして子供の所へ飛んで戻り、子供を抱き座りました。ソ連兵は戸を閉めていました。何のために立っていたのか、私には分かりませんでした。そのとき思

い出したことは、東寧から避難したときに、ソ連軍戦車が何十台も轟々と大きい音を立てて向かってきたときは、もう駄目だと思い、みんなばらばらと逃げたのですが、私は美津志を亡くしたばかりで、みんなに付いて行けなかったのです。私がかがむと登志郎が撃たれてしまうので、じつとソ連兵を見つめて立っていました。そのときには覚悟していました。先頭の戦車のソ連兵も、長い間私の姿が見えなくなるまでこちらを眺めていましたが、私はそのソ連兵に向かって深々と頭を下げました。自然とそうなったのです。戦車の通り過ぎるまで、私は頭を下げていました。登志郎は私の背にしがみついています。最後にもう一度、頭を深く下げました。「良かったね、登志郎ちゃん、お利口にしてたからね」と言いながら、立っていた山裾の溝へへたり込んでしまいました。絶対殺されると思っていました。最初にこんな目に遭いましたから、親は少しずつ強くなっていったのです。

六 敦化から吉林へ

この間のことは私の頭がどうなっていたのか、あまりにも記憶が残っていないのですが、広い丘のような所でしたが、木は一本もありませんでした。避難民の姿もあまり見られなかったと思うのですが、空から飛行機が落としてくれたチョコレートのは、うろ覚えに思い出します。周囲にもいっぱい落ちてくるのです。空を見上げると、飛行機が飛びながら落としてくれていました。これは多分ソ連軍のだなと思っただけで、一つ拾って食べてみましたらおいしいので、登志郎にも一つ渡すと「おいしい」と言ったので、あたりののを四、五个拾って袋に入れました。「ほしいときは、いつでも頂戴って言うのよ」と歩きました。

吉林の日本人学校跡は広くて、子供も喜びました。敦化にいたころから登志郎は、私が「おいしかったか？」と問えば、ただにっこりするだけ、手や足をさすつてもにっこりするだけでした。「もつと喋ってよ！」と抱きしめても、ただ嬉しそう

にするのですが、言葉はありません。「早く良くなるうね」と立たせたけれども、立てませんでした。三歳ぐらいの子供でも、五カ月も背中に背負われていれば子供なりに分かるのか、負ぶさつても楽な格好もできず、何がほしいとも言わず、お水が欲しい欲しいとかわいそうで、手や足もそつとさすつたり何を言つても、にっこりするばかりでした。

吉林に着いて三日目の午後でした。「登志郎、好きなもの買って来るからね」と言うと、頭をこっそりしたのです。「すぐ帰るからね」と言つて、教えられた所で買い物をして帰ったところ、ぐつたりしているので急いで抱き起こしましたが、目を閉じていました。笑っているようないつもの顔でした。「どうしたの！ 母さんが待てなかったの！」と何回も何回も聞き返しました。「ゴメンね、おいしいものを口に入れてあげたかったのに」と話しかけましたが、涙が流れて止まりませんでした。隣の人に迷惑をかけては悪いと思いましたが、

子供が死んだことを告げました。隣の人は驚いて「ちつとも分かりませんでした。かわいそうなことをしました」と悔やんでくれました。

「すみませんが、どんなものでも良いのですがこの子が入れるぐらいの木箱を探して下さい」と頼みましたら、買って来てくれました。周りの人たちが、知っている人にお経も頼んでくれました。読経のうちに、この建物の後ろの空き地に埋めさせていただきました。昭和二十年十一月のことでした。

その後、吉林市では街の中にこんなに公墓ができては困るということから、吉林の山へ公墓を移すことになりました。新しい墓所は、良い眺めだし静かなので安どしました。埋葬するときは、大抵の人はセメントの袋に入れられましたが、それではあまりにも登志郎がかわいそうだと思い、お金を渡して木箱に入れてもらいました。転墓のときは、日本人避難民の大多数の人が参列して下さいました。嬉しいことでした。

避難命令に取り残されるを恐れつつ
何処に逃れむ黄砂ふる道

我が背^せ中にしっかり付きて無理いわぬ
子が「お水がほしい」に草かき分ける
山萩に宿れる白露手にうけて含ませし
吾子も遂に逝きたり

轟々とソ連車の迫りきて山裾溝に
かくれむとせど子は背中の上
目的地へ行かむとよるばい歩む道
湿原となり足とられたり
くらぐらと夜の湿原続きいて幾度
体のまれぬとせり

遠き野火を目標として逃れ行く山中
暗く夜長かりき

子の泣けば子を守らむと共に行く
人とも別れ一人彷徨う

「この子より先には逝けぬ」と一つ言
念仏のごと唱え山越ゆ

行く先はどこか分からぬそれもよし
親子で共に絶えて求めん

吾子二人なくせし心沈みきて
発疹チフスの熱高まりぬ

遂にわれ一人になりてあてどなき
思いに父母の顔浮かび見ゆ

私はまだ幸せなんだ、父も母も兄妹もいてくれ

ると有り難く思つたものです。

私はもうどんなになつてもよいと思いましたが、このとき故郷にいる年老いた両親の顔が思い浮かびました。こんな弱い気持ちではいけない。親はどんなに心配してくれているか分からないのに、と思いました。しかし、高い熱が出てどうすることもできません。幸いに医師が診てくれて発疹チフスと診断され、隔離病棟へ移されました。広い病棟の中は病人でいっぱいでした。

静かに寝られたお陰で少し持ち直しましたが、ある夜、急に右眼が見えなくなりました。五十メートルほど離れた所に眼科医がおられるとのことでしたが、そこまで行くのに歩けなくて、一時間もかかったように思いました。診察の結果は栄養失調で、体も心も弱っているが、「森さんは運が良いですね。明日、日本からカルシウム薬が届きますよ」と言つて下さり、さらに「急に悪くなったから、良くなるのも早いよ」と言つてくれました。これも神や両親や皆様のお陰と、感謝の念でいっ

ばいになりました。

発疹チフスの病室からは長いこと出してもらえず、入室患者はだんだんに増えて、百人以上になりました。着ているものは全部大きな釜で煮沸して消毒するのですが、消毒が終わるまで何を着ていたのか全然覚えがありません。枕元の湯飲みの水を飲もうとしましたが、凍り付いて飲めませんでした。体も大分良くなつてからですが、何を食べていたのか思い出そうとしても高粱粥を三回ぐらい食べたこと以外には、何も思い出せません。記憶喪失になつていたのでしょうか。

やつと回復して通院しました。ある日、吉林の街を歩いていたとき、「森さん、タイタイ」と呼ばれて振り返ると、以前に主人の使つていた満人でした。五月の節句に豚の丸焼きを両足をくくつて持つて来て、「重かった。これを食べて下さい。中国ではお正月よりお節句の方を大切にする」と話していました。「謝々」とは言つたけれど、豚を目の前にして私は飛びのいたので、みんなに大笑い

されたことを思い出しました。その満人は「私、吉林で中華料理店を経営しています。近いから来て下さい」と連れて行かれ、大変にご馳走になりました。「また是非いつでも来て下さい」と言われましたが、よくお礼を言つて、二度と行きませんでした。

七 一人での避難行、新京から葫蘆島へ

新京では故郷の人に会い、親切にしてもらいました。ここでの避難生活が一番長かったのですが、何もすることなく体も弱つていたので寝たり起きたりの生活でした。新京からは無蓋貨車で一月余りかかり、葫蘆島からこの引揚船にやつと乗ることができました。引揚船の中で「森ミヨ子さん」と呼ばれ、「はいっ！」と思わず手を挙げたら、その人は幼友達でした。神戸の商船大学に行かれ、今はこの引揚船、リバティの乗組員として私たちを迎えに来て下さったとかでした。真っ白いスーツで一番目立っていて、親切にいろいろ話され、「ほしいものは？」と聞かれましたが、周囲の人

もこれだけ大勢の人たちがお世話になっておりましたので、何もいりませんとお礼だけ言いました。私は「立派になられた姿を一目見ただけでも嬉しく驚きました！」と言うと、「いやあ」と言われませんでした。嬉しいやら悲しいやらの、複雑な気持ちでいっぱいでした。

私はその後、船底の室で眠り続けました。高熱に耐え、雨風にも寒さにも我慢できたのは、皆様のお陰と感謝し、子供たちの冥福を静かに祈ることができたのも、この船の中だったと思います。

瀕死の状態で博多へ上陸し、消毒されて支給された服に着替えて、引揚列車に乗りました。汽車の中では目を閉じていました。お陰で途中無事に故郷まで運んでくれました。まず主人の家に帰り、「心配かけました」とあいさつしました。「子供を、せめて一人だけでも連れて帰りたいのですが、亡くしてしまいました。主人も行方不明なんです。申し訳ありませんでした」と涙ながらに引揚げの様子を話しました。「こんなときには仕方がない

ことだ。ゆっくり休みなさい。浪越さんへは行ってきたの？」と言われましたので「まだです。まづこちらへ帰ってからと思ひまして」と言ったら、「早速行つて安心させてあげなさい」と勧めてもらいましたので、実家へ行きました。苛酷な状況の中をやつと潜り抜けて、さらに今から耐えねばならないと思いつつ、生家へ向かいました。

八 引揚げ、生家に帰る

「只今帰りました。ご心配かけました」と大声を出しました。玄関に出て来た父が、奥へ向かつて「おーい、ミヨ子が帰ったよ」とどなると、「まあ、よく帰れたね」と母をはじめ兄、姉、妹たち全員が飛んで迎えてくれました。父が「東寧玉砕のことを新聞で見っていた。あの子は、もう下の子が生まれているかどうかというときだし、上の子供は三歳だし、覚悟はしていたが！」と言いながら涙を流し、「大変だったなあ、その顔色は生きている人の顔色とは違う。ゆっくり体を休めなさい」と言ってくれました。母も私の顔を見つめたまま、

涙をこらえていました。その後、森の家に戻りましたが、働かなければと思つて、帰るまでは熱があつたのも忘れて、草取りでもさせて下さいと農作業を手伝っていました。それからも体がはつきり倒れてしまいました。それからも体がはつきりせず、目眩を起こしていました。森の家の皆さんたちには、迷惑をかけて申し訳なく思いました。実家へ帰ると父は顔色を見て「それではいけないけど、お嫁にあげたからには主人の消息が分かるまでは辛抱なさい」と言われ、私もそう思つていますとは言いましたが、自然に涙がぼろぼろと落ちました。じつと私を見つめていた父が、「よし、分かった。森さんへ行つてくる」と言つて出掛け、森の家族と話し合いました。「娘の体調が悪そうなので、森さんが復員して来るまで、浪越に預らせて下さい。お願いします。森さんも裸一貫で帰つて来ると思います。娘の体が良くなつたらどこかへ勤めさせ、少しでも貯金をさせておきたいと思うのですが、どうでしょうか」とお願い

すると、森の兄が「分かりました。よろしくお願ひします」と言われ、それから私は浪越の家で過ごすことになりました。

森の兄は「これはミヨ子さんの食糧です」と言つて、月々お米を持つて来てくれました。父は「森さんはよくできた人だなあ。ミヨ子も早く良くなつて、お勤めできるようになりなさい」と励ましてくれました。父にも森の兄にも、どんなに有り難く思つたか分かりません。父にも大変な苦勞をかけました。

健康状態も大分良くなり、叔父の会社に勤め、夜は妹と洋裁学校へ行きました。

満州では二人の子供がいたので、心も体も強くなれたし、引き揚げてからは両親や兄妹に見守られてなんとか過ごすことができて、私は幸福者でした。

九 主人無事帰国

昭和二十三年五月、ソ連に抑留されていた主人が帰つて来ました。やつと念願が叶いました。帰

国の届出は仁尾町役場ではなく高松市役所に行つて下さいとのことで、主人と高松に行きました。

その途中で、偶然にも満州で一時一緒だった末包さんに会いました。「森さん、帰られたのですか。

僕は一步先に帰国して、今は四鉄工業に勤めています。会社はものすごく忙しいので高松に出てきませんか？」と言つてくれて、主人はその場で「お願いします」と頼んで、家に戻つてその話をしたところ、家族はみんな反対でした。しかし、森は高松行きを決心しました。最初は末包さん宅で世話になっていましたが、いつまでも世話になることは申し訳ないので、借家を探してもらいました。初めは四鉄工業などの仕事が多かったのですが、そのうちに民家の建築も多くなり、仕事が忙しくなりました。忙しくなつて大工さんたちが大勢集まると、主人は「段取りが一番大事だ」とばかりに朝早くから現場に入り、夜は見積もりやら図面引きやらで寝る間もありませんでした。「なに、三時間も寝れば大丈夫だよ」と頑張っていました。

大工さんたちもだんだんと主人の氣質を分かつてくれて、材木屋さんが倉庫代わりになっている所を、木組場所に使わせてくれるようになり、少しはよくなつてきました。

資金繰りなどで、私が働いていたときに蓄えた貯金もすぐに無くなりました。税務署の人が納税の件で来たときには、主人がシベリアでどんなに苦勞したか、また私は満州からの避難行で最愛の子供二人を亡くし、それこそ死ぬ思いで病気になるながら、やつとこのことで仁尾に帰つて来たことを話しますと、みんなは聞き耳を立てて聞いてくれました。税務署の人も、「ああ分かりました。今年の税金は結構です」と了解してくれました。

昭和二十四年六月に男の子が生まれたのですが、何日もしないうちに破傷風で亡くなりました。半年ぐらいは、悲しみに暮れていました。仕事も順調に進展していましたが、その半面にはいろいろと大変なこともありました。

昭和二十六年に長女が生まれ、昭和二十九年に

は四男が生まれましたが、この二人の子供は病氣一つせずにそれぞれ育ちました。

平成三（一九九一）年六月三十日、入院生活一

年の主人は、七十三歳で亡くなりました。この間、私も子供二人も一生懸命に看護しましたが、力及びみせませんでした。息を引き取る間際には、「ありがとう」と言ってくれました。結婚して初めて聞く、大切な言葉でした。この「ありがとう」を大切に心を持って、私はこれからの余生を明るく守りたいと思っています。

終わりに、引揚者の語り継ぐ労苦がどれほどの苦勞であるかに感銘し、私がよみがえったこと、そして主人が今も守ってくれていることに感謝をし、またご縁を頂いた皆様にも深く深く感謝を致して止みません。

ちなみに東寧より避難して尾根から尾根へとほとんど連夜の野宿で吉林まで歩き続けました。

「三千三百キロメートルは歩きましたよ！」と教えられたときには、とても私の力ではないと不

思議に思いました。助けていただいた皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

黄泉路行く夫の足元明るきや
廻り灯籠巡りやまざる